岡崎道成・作

４０万円の保証人

＜前編＞

塾長　じゃあこれ、今月分の給料ね。こっちが大森君で、こっちが福田君。これは今まで君たちがよく頑張ってくれたから、わたしのほんの気持ちだ。今まで本当にご苦労だったね。

福田正希　うわ、いいんですか。じゃ、遠慮なく。

大森敬一　でも、この塾、これで閉めちゃうのかと思うと、寂しいよなあ。

正希　おれも敬一も、大学入ってから2年間ずっと世話になってたしな。この塾の講師のバイトしてたおかげで、学生らしい生活ができましたよ、塾長。

敬一　何が学生らしい生活だよ、正希。稼いだものはパチンコとマージャンに消えてたくせして。

正希　それを学生らしいというんだ。

塾長　ははは。まあ君たちにはこんなことになってしまってすまないと思ってるが、こう生徒の数が少なくなっては、にっちもさっちもいかなくなってなあ。

敬一　仕方ないですよ、今は子供の数も減ってるし、やっぱり大きいところの方が親も安心して子供を行かせられるんでしょうね。

正希　ここに来れば、おれがいろんな面白いこと教えてやるのに。

敬一　お前のせいで生徒が来なくなったんじゃないのか？

正希　そうか？　そういや生徒にタバコ吸わせたりしたからな。ははは・・

N　おれの名は福田正希。青春大学法学部2年。一緒のアルバイト学生は、小学・中学と同じで、今また同じ大学に籍を置いている大森敬一。クリスチャンで、根っからのマジメ人間。本来なら遊び好きのおれとは到底相容れない人種のはずなのだが、その何とも言えない包容力というか、あったかいところが、物事をじっくり深いところで考える頭の良さと実によくマッチングしてて、その辺がカラキシ弱いおれには、得難い存在の親友なんだ。

敬一　それで、塾長はこれからどうするんですか。

塾長　うん…　そのことなんだがね。実は、君たちに頼みがあるんだ。いや何、大したことじゃなんだが…。

正希　何ですか、塾長？　改まっちゃって。

敬一　僕たちにできることなら喜んでしますよ。今までお世話になったんですから。

塾長　いや、そう言ってもらえると、こっちも話しやすいんだが。実はしばらくの間、ある会社で事務

の仕事をやらせてもらおうと思ってるんだ。そこでなんだが、君たちにわたしの身元保証人になってもらいたいんだ。

正希　保証人…ったって、おれたちまだ学生ですよ。保証人の資格なんてないんじゃないかなあ。

塾長　あーいやいや、それは大丈夫なんだ。何も借金の保証人になってくれなんていうんじゃない。わたしが信頼に値する人間だということを、友人として保証してくれればいいんだ。

敬一　塾長の人柄は、僕たち今までお世話になってて よく分かってます。…でも、やっぱり僕たちより、ちゃんとした大人のほうがいいんじゃないですか？

塾長　それなんだよ。わたしだって、できれば学生の君たちにこんなことは頼みたくないんだ。だが君たちも知っての通り、わたしは自分で塾を開きたくて、わがままを言って会社を辞めた人間だ。兄弟たちや周りの反対を押し切ってな。今さら「塾がつぶれました」なんて言えんのだ。しばらく勤めて資金がたまったら、必ずまた塾を再開する。それまで、人にあまり知られたくないんだ。一緒に頑張ってきた君たちなら、分かってくれると思ったんだが…。

正希　分かりました、塾長。おれたちでお役に立つなら、ハンコの一つや二つ、喜んで押そうじゃないですか。

敬一　おい、正希。

正希　ん？

敬一　ちょっと…。

正希　何だよ。

敬一　いいから来い。塾長、ちょっとこいつと相談してきます。

N　そう言うと、敬一はおれを部屋の外に連れ出した。

正希　何だよ、敬一。お前、塾長がああやって頭下げてるのに断るのか？　塾長の人柄は分かってるって、お前言ったじゃないか。

敬一　それとこれとは話が別だ。正樹、お前、身元保証人がどんなものか分かってるのか？

正希　分かってるよ。保証した相手が会社に何か損害を与えて、その人に償う能力がない時は、その人の代わりに弁償しなきゃならないんだろ。大丈夫だよ。塾長だっておれたちに金のないことくらい十分分かってるよ。おれは、ほかの人に頼みにくいっていう塾長の気持ち分かる。聞いたろ。友人として頼まれてるんだよ、おれたち。

敬一　それは分かるけど…。

正希　何だよ、思い切りの悪いやつだなあ。困ってる人を助けるってのはキリシタンの教えにもあるだろ。

敬一　　相変わらず手厳しいな。そこまで言うんなら、おれも腹を決める。

正希　　大げさだなあ、「この人は悪い人じゃありません」って証明するだけのことじゃないか。大丈夫だって。

（効果音）（2人、部屋に入る）

塾長　　相談はまとまったかな。

正希　　ええ、改めて塾長のためなら喜んでお役に立とうということになりました。な、敬一。

敬一　　あ、ああ。

塾長　　いやー、ありがとう、助かるよ。君たちに迷惑をかけるようなことはしないから、安心してくれたまえ。

N　　こうしておれと敬一は、塾長の身元保証書に判を押した。生まれて初めての保証人だ。その時のおれには、「金に縁のないおれたちに、金にかかわる頼みを塾長がするわけがない」という安心感があったのだが…。それから数日後、おれのアパートに訪ねてきた敬一と話していると――

（効果音）（電話のベル）

正希　　はい、福田です。

母　　（フィルター音）あ、もしもし、正希？

正希　　何だ、おふくろか。

母　　（フィルター音）何だってことないでしょ。ね、正希。何なの、この間の「20 万頼む」っていう葉書は？

正希　　ああ、あれか。…あのさ、おれやっぱり車買いたいんだけどさ、いや、もちろん中古だよ。それでさ、40 万円なんだけど、そのうち 20 万何とかなんないかなと思ってさ。

母　　（フィルター音）車なんてあんた、必要なの？　大学だって歩いてすぐなんでしょ？

正希　　いや、大学じゃなくて、いろいろとあるんだよ、こっちも。

母　　（フィルター音）遊びで使うんなら、親に甘えたりしないで自分で何とかしなさい。毎月の仕送りだって決して楽じゃないのよ。お母さん、あんまり体丈夫じゃないし、今のパートの仕事、いつまで続けられるか分からないんだから。

正希　　だからさ、車買ったらガソリン代とか保険だってあるし、そういうのは自分で出すからさ。

母　　（フィルター音）当たり前でしょ、そんなの。車の免許の時は、学生のうちの方が取りやすいからって無理して出してあげたけど、車のほうまで親に面倒かけないでちょうだい。

正希　　ちぇっ、シケてんなあ。おやじは？

母　　（フィルター音）お父さんは、「貸すんならいい」って言ってるけど。

正希　　あーあ、世の中そんなに甘くないか。じゃその、借りるほうで何とかお願いしますよ。

母　　（フィルター音）正希、そんな車乗り回すことなんか考えてないで、ちゃんと勉強しなさい。学生の本分は勉強なのよ。

正希　　分かった分かった、今、友達来てるんだ。またこっちからかけるから。じゃ悪いね。

（効果音）（電話切る）

正希　　あーあ、話の分かんない親だな。今どき学生だって車持ってるのなんか常識だよ。なあ、敬一。

敬一　　でもやっぱり、買うんなら自分でバイトしたほうがいいと思うな、おれは。

正希　　そりゃそうだけど、たまるまで待ってたら学生終わっちまうよ。あの塾みたいにオイシいバイトなかなかないし。それにおれ、勉強忙しいからさ。

敬一　　よく言うよ。

N　　こうして、おふくろにニベもなく断られても、車への思いは募る一方。それから間もなくして、とうとうおれは、少なくとも見かけはまだいい中古を格安で手に入れた。

（効果音）（大学のキャンパス、車のクラクション）

敬一　　正希。何だ、買ったのか、これ。金はどうしたんだよ。

正希　　おう、自分で出せる分で何とかしたよ。だいぶグレードは落としたけどな。もう講義は終わりか？

敬一　　ああ、今日はもう終わったよ。

正希　　じゃ乗っていけよ。アパートまで送るから。

敬一　　いいのか、最初に乗せるのがおれでも？

正希　　何をおっしゃる。いつもお世話になっている敬一さんですから。

敬一　　へえ、でもおれのアパートまでだったら、せいぜいノート1日分だな。

正希　　じゃ、うんと遠回りして帰ろう。乗れよ。

N　　こうしておれは、敬一をアパートまで送っていった。親友を自分の車で送る。相手が彼女でなくても、それなりにおれは満足だった。まあ正直言えば、少しばかり優越感も混じっていた。ところが、そんな優越感などモロに吹っ飛ぶようなことが待っていた。

（効果音）（車が止まる）

敬一　何も首都高速、走り回らなくたっていいのに。あ、手紙が来てる。…恵商事？　ダイレクトメールかな。

正希　恵商事？　それ、もしかして塾長が働いてる会社じゃないか？

敬一　あ、そうそう、そうだよ。それが何でおれに手紙なんだ？

正希　いいから開けてみろよ。

敬一　えーと、「拝啓、大森敬一様、福田正希様」おい、お前の名前も書いてあるぞ。うーん…と、「先日弊社の社員橋本唐二郎が突然出社しなくなり、現在まで連絡がとれておりません。既に自宅は引き払われており、調査の結果先月の橋本の担当する決済金の中から 40 万円の用途不明金が発見されました。つきま…」

正希　何だと!? 「つきましては、誠に不本意ながら橋本の身元保証人であります大森、福田御両名様には至急弊社までご連絡くださいますよう、お願い申し上げます」 何だよ、これ!!

敬一　つまり、塾長が、会社の金を持ち逃げしたから、弁償しろって…　そういうことだろ。

正希　ちょっと待てよ、何かの間違いだろ、塾長がそんなことするはずない！

敬一　とにかく、塾長の家に電話だ。

（効果音）（電話呼び出し音）

TEL　（フィルター音）お客様がおかけになった番号は現在使われておりません。もう一度番号をお確かめに…

（効果音）（電話切る）

敬一　塾長の家だ、正希。

正希　あ、ああ。

N　おれは塾長の家に車を飛ばした。足がガクガクして、ハンドルを握る手がジワッと汗ばんでくるのが分かる。

（効果音）（車が止まる）

正希　敬一、表札がねえよ、チクショウ！

（効果音）（ドアたたく）

２人　塾長、塾長…

正希　何てこったよ。信じらんねえよ。

声　40 万円の用途不明金が。40 万円の用途不明金が…（多重エコー）

N　おれの頭の中は、スーッと空白になっていった。

＜後編＞

恵商事社員　ですから差し上げた手紙にも書きました通り、橋本がわたしどもの会社の金を持ち出したのは間違いありません。この決裁書の、ええと、これです。この 40 万円を引き出した後、橋本の行方が分からなくなりました。変だと気付いた時には既に家も引き払われていまして。わたしどもとしましても大変困っているところなんです。

N　おれ、福田正希。親友の大森敬一と共にアルバイトをしていた塾が閉鎖することになり、世話になった塾長の再就職先の身元保証を引き受けたのだが、塾長が失そうしたとの連絡を受け、その会社に呼び出されたのだ。

正希　塾長が持ち逃げなんて…　おれ、やっぱ信じらんないよ。

社員　塾長と言いますと？

敬一　その、橋本さんは3か月前まで僕とこの福田がバイトしてた塾の塾長だったんです。

正希　おれたち、塾長にはずっと良くしてもらってたし…。

社員　それでお二人で彼の身元保証人になったってわけですか。

2人　はい。

社員　それにしても、学生に保証人を頼むなんてねえ。君たちも君たちだ。保証人がどんなものか、大学生にもなったら分かるんじゃないですかね。

敬一　そのくらい分かってます。確かに軽率だったかも知れないけど、判を押したからには責任はとります。

社員　いいでしょう。学生さんに責任をとらせるというのは少々気が引けますが、これも社会のルールです。あなた方に 40 万円お願いすることにします。

（効果音）（道路工事現場の音）

正希　ふう、おれもうダメ。だれだよ、夜間の道路工事のバイトなんか見つけてくるやつは。

敬一　これが一番金になるんだから文句言うな。何とか夏休みのうちに 40 万円稼がなくちゃなんないんだからな。あー、腹減った。帰ろう。

正希　それにしても塾長には頭来るよな。何でおれたちが、こんなきついバイトしなくちゃなんないわけ？　赦(ゆる)せないよな、人の信頼を裏切ってさ。

敬一　正希。おれさ、確かに腹立つときもあるんだけど、一つ気付いたこともあるんだ。

正希　気付いたこと？

敬一　　イエス・キリストもこんな風にして人のために苦しんだんだなってさ。今までだって頭では分かってた。だけど、今は何かこう、体で分かったって言うか、実感として分かったって感じなんだよな。

正希　　キリストねえ。あの十字架ってやつか。

敬一　　ああ。このバイト初めてやった日は、あんまり疲れて飯も食えないくらいだった。翌朝、体中が痛くて起き上がれなくてさ。これが夏休み中続くのかと思うと、「何でおれが」って無性に腹が立った。その時ふっと思ったんだ。おれもキリストを十字架につけたんだって。キリストは十字架の上で、肉体の苦しみと、神に捨てられた心の苦しみとを味わったんだって。おれのために、そして正希、お前のために。

正希　　おい待てよ。お前がキリストの十字架を自分のためだって思うのは勝手だよ。だけど、おれはそんなこと全然思わない。第一、おれが何かしたか？

敬一　　正希…

正希　　いや、今日は言わしてもらうぞ。お前たちクリスチャンは、人間はみんな罪人だって言うけどさ、うそつきから人殺しまで「罪」って枠でひとまとめにするなよ。泥棒だって罪の大小で刑の重さが違うだろ。何でお前らはいつもちょっとしたことで、ごだいそうに十字架まで話を持っていくんだよ。そんなんでいちいち死なれてたんじゃ迷惑だ。大げさなんだよ、考え方が。暗くてかなわねえよ。

敬一　　そうじゃない！　自分の罪の深さに気付いて、そこから救われた喜びをクリスチャンは持ってるんだ。

正希　　おれは自分がそんなに罪深い人間だとは思わない。そりゃ塾で子供にタバコ吸わせたことくらいはあるけど、でもそんなのキリストに死んでもらうほどのことじゃないだろ。

敬一　　…正希、これはお前には黙っていようと思ったんだけど…

正希　　何だよ。言いたいことがあるんならはっきり言えよ。

敬一　　小学校5年の時、クラスに並木ゆかりって女の子がいたろ。

正希　　並木ゆかり？　並木並木…　あ、分かった、あの顔にアザのあった子だろ。無口でさ、ほかの人としゃべってるの見たことなかったな。その並木がどうした？　お前、まさかホレてたとか？

敬一　　秋の遠足の時、グループ分けをしただろ。

正希　　うーん、そうだっけ。

（回想）

先生　　はーい、それじゃあ遠足のグループ分けをしますよ。どんな分け方がいいか、意見がある人

―。

生徒　　はーい、好きな人同士がいいです。

（ガヤ）そーだそーだ

正希　　はーい。

先生　　はい、福田君。

正希　　くじ引きがいいと思いまーす。

（ガヤ）えー、なんでー

先生　　みんな好きな人同士がいいみたいだけど、福田君はどうしてくじ引きがいいの？

正希　　だって、好きな人同士だとどこにも入れない人がいるかも知れないよ。そしたらかわいそうじゃん、その人。

先生　　そうかしら。先生はちゃんとグループ組めると思うけどな。

正希　　でももし組めなかったら、やっぱりかわいそうだと思いまーす。

先生　　ねえ、福田君…

正希　　くじの方がそういうのが出なくて、公平でいいと思いまーす。

並木　　（泣き出す）

敬一　　おい並木、並木、泣くなよ…。 正希のやつ、自分だけいいかっこしやがって！

（回想終わり）

正希　　そういや、そんな事もあったな。

敬一　　おれ、高校生になってから彼女にばったり会ったんだ。その時、その遠足の話になってさ。お前にあんな風に言われた時は、死ぬほどつらかったって彼女言ってた。

正希　　死ぬほど？

敬一　　自分なんかいない方がいいって思ったって。転校した先の学校でも、自分は嫌われ者だって思い続けてたそうだ。

正希　　おれの言葉が、そんなにあいつを傷つけていたなんて…。おれ、自分ではあの子の見方のつもりだったんだ。

敬一　　言葉って怖いよな。自分の知らないうちに人を傷つけてるかもしれない。もしその言葉で、立ち上がれないほどの打撃を与えるとしたら、その言葉で相手を殺したことにならないか？

正希　　…そうかも知れないな。それで、お前が会った時は、あいつどんなだったんだ？

敬一　　いや、それがさ、中学生になった時、母親が「これ読んでみたら？」って聖書をくれたんだって。自分も若いころ読んでたやつらしいんだけど、やっぱり娘の心の悩みを気付いてたのかな。それで聖書を読み始めて、彼女、変わっちゃったんだって。

正希　　変わった？

敬一　　うん。ほかの人ばかり悪者にしてた自分の心の醜さと、そんな自分を愛してくれる神様の存在を知ったら、変わっちゃったんだって。おれ、びっくりしちゃったよ。彼女、あんなにいい笑顔持ってたのかって。おれが教会に行くようになったのは、それからなんだ。

正希　　そうだったのか。

敬一　　あの時、彼女に聞いた聖書の言葉は、はっきり覚えてる。「わたしの目には、あなたは高価で貴い」。

正希　　「わたしの目には、あなたは高価で貴い」？　“わたし”ってだれだ？

敬一　　神様だよ。

正希　　分かった。じゃ“あなた”ってのは、さしずめ人間ってわけだな。

敬一　　すごい、正希。その通りだよ。

正希　　だけど人間はみんな罪にけがれてるんじゃないのか？　それなのにどうして高価で貴いんだ？

敬一　　それは、神様がおれたちをそれだけ愛してるってことなんだ。考えてみろ、おれたちは塾長をいい人だって信用して保証人になった。結局は裏切られたけどな。初めからそれが分かってたら、だれだって保証人なんかにならない。でも神様は、おれたちが罪ある人間だって初めっから分かってたんだ。分かってたのに、キリストを保証人につけてくれた。しかも、この保証人が払ってくれた代価は「命」だ。ご自分の命と引き換えに、おれたちを丸ごと罪の中から救い出してくれたんだ。聖書は言ってる。「ここに愛がある」って。…ここに、ホンモノの愛がある。正希、そうは思わないか？

N　　おれは、敬一の話を黙って聞いていた。何か、目に見えない熱い塊が、迫ってくるというか、あいつの話はその時のおれの心の中にジンジンと入り込んできた。
—それから1週間後。

正希　　おい、敬一、早くしろよ。礼拝に遅れるぞ。

敬一　　分かった分かった、お前に教会に行くのをせかされるなんて、ひと月前まで思いもしなかったよ。…あれ？

正希　　どうした、忘れ物か？

敬一　　いや、あのおれの部屋の前にいる男の人…

正希　　あ!!

2 人　　塾長!!

塾長　　ああ、大森君、福田君、この通り、この通りだ。（深々と頭を下げる）

正希　　塾長、いったいどういうことなんですか？　おれたち、おかげで…。

塾長　　いや、本当に君たちにはすまないことをしてしまった。君たちの純粋な信頼を裏切ってしまって。赦してくれ、この通りだ。言い訳がましいかも知れんが、あの金は会社がかなりあくどい商売をした金だったんだ。それを見ていて、自分がコツコツ仕事してるのがバカらしくなってしまって…。しかし君たちを裏切ったことには変わりない。今さら顔を合わせられる義理じゃないんだが、心の責めに耐えられなくて会社に謝りに行ったら、お金は君たちが弁償してくれたと聞いてな、居ても立ってもいられなくなったんだ。本当にすまなかった。

敬一　　塾長、頭上げてください。もう済んだことですから。

正希　　そうですよ。それに、塾長のおかげでおれ、すばらしいものを手に入れたし。な、敬一。

敬一　　ああ。

塾長　　すばらしいもの？　一体何のことだね？　とにかく、会社に返すつもりでお金も持ってきたんだ。頼む、受け取ってくれ。

正希　　塾長、お金は後でいいから、後ろに乗りませんか。いい所に連れていってあげますよ。

塾長　　いい所？　おい、どういうことなんだ？　君たち、わたしを責めないのか？　何でそんなにさっぱりしてるんだ？　な、福田君、どうしてなんだ？　な、大森君…　ど、どこへ行くんだ？

N　　驚く塾長を押し込んだおれたちの車は、一路走り出した。イエス様の待ってる教会を目指して。

＜完＞